

県内で農産物と海産物の流通量を増やそうと、伊賀市と尾鷲市内にある直売所が3月から、直売所間で産品交流が始まり、新しい「地域内流通事業」を開始した。産地間を結ぶ独自の物流・流通網を整備することで、農産物と海産物の消費エリアの拡大を目指す。

主に地場産品を扱う県内の直売所では、同種類の野菜などがたくさん出荷されることで値崩れや売れ残りが起きることが大きな課題となっていた。

これを解決するため、三重県フードイノベーション課から委託を受けた百五経済研究所（津市）が、伊賀市平野西町のJAいがほくぶ「とれたて市・ひぞっこ」

直売所間で産品交流始まる

▲海産物が並ぶ「ひぞっこ」の店内



農
伊賀



海
尾鷲

▲伊賀米などの農産物が並ぶ「おとと」の店内

と尾鷲市古戸野町の「お魚いちば・おとと」で、地場産品を相互に販売する県内初の物流網を試験的に構築。要となる物流や店頭への陳列は、伊賀市荒木の中田商事が担った。

話も出てきて、生産者のモチベーション向上にもつながってきている」と話す。同社は県内の海の幸と山の幸を四日市市内など都市部のスーパーで販売する事業「たべねつとみえ」を展開する大王運輸（本社・明和町）と協力し、週3回から4回程度の伊賀と尾鷲の定期便を出して事業を継続していくという。

2月18日から始まった14日間の試行実験では、「ひぞっこ」からはチヂミホウレンソウなどの季節野菜、伊賀米などの農産品を出荷。「おとと」からはマグロや赤イカ、アジ、イワシなどの鮮魚が出荷された。

百五経済研究所の山本浩和さんは「生産、物流、販売の現場で、互いに利益が出る持続可能な仕組みをつくることが重要。これから新しい物流と流通の仕組みを作っていきたい」と話している。

同社の担当者は「旬の鮮魚を店頭に並べたので、伊賀のお客さんの関心も高かった」と振り返る。「ひぞっこ」の竹中俊光副店長は「野菜の売れ残りが減るだけでなく、生産量を増やす

26・35335へ。問い合わせは中田商事